

教育広報

南 会

編集・発行 福島県教育庁南会津教育事務所  
 発行責任者 武口 隆行  
 編集協力 市町村教委連絡協議会南会津支会  
 南会津郡小中学校長協議会



## 『教え』の教育から『学び』の教育へ

南会津教育事務所長

武口 隆行

6月から南会津域内の各校を訪問させていただいています。

その中で、これまで特に印象的だったのがある小学校の複式学級での授業です。教師がいない場面で学習リーダーを中心に子供同士が互いに学んでいる姿。対話を通して他者と学び合い、考えを深めている自立した子供の姿。複式学級でよく言われる、指導する時間が少なくなるのではないかと心配を全く感じさせない授業でした。一見、教師は何もやっていないように見えますが、授業を計画する段階で子供の思考過程の見通しをしっかり持ち、教師の敷いたレールに乗せるのではなく、子供自らの学びに沿って展開する授業で、素晴らしい実践だと感じました。

先生方の中には、授業において子供に考える場面を確保することが大切と思っても、教師が教えた方が身に付くのではないかと、その間のジレンマで悩まれている

方は少なくないと思います。私自身も、自分の知識をわかりやすく解説する授業の方がよほど簡単で理解しやすく、効率がよいと思っていた時期もありました。しかし、受動的な授業はすぐに忘れてしまう傾向にあり、思考力も育ちません。一方、先ほどの小学校の授業のように能動的な授業は、子供自身のペースで考え、理解しながら進むので定着しやすくなります。このことはこれまでの調査結果からも明らかになっています。

本年度、教育事務所では、指導の重点の一つに「自ら学ぶ子供の育成」を掲げています。指導主事同士で、その実現に向けて話し合いを進めています。今後、先生方へ話題として提供し、その解決の糸口を一緒に考えていきたいと思っています。「教え」の教育から「学び」の教育へ、真の意味で授業を根本的に改善する「学びの変革」の実現に向け、努力する先生が増えていくことを願っています。



## 「鎧を脱ぐ」

郡小中学校長協議会長

大桃 豊

教員に必要な資質を生まれつき備えた人間がはたしてどれだけいるだろう。多くは教育現場に立って初めて、薄い衣を順に纏うように経験年数とともにそれを着重ねていく。それは教員という身分における、社会に対する責任であったり、自分に求められる信頼であったり、倫理観、規範意識といったもの……。

そうして身についたものは、いつしか管理職になるころには、強固な鎧と化している。これは自分自身を守ってくれる一方で、時に閉塞感と息苦しさは否めない。あらためて全身を姿見に映してみると、自由奔放であった学生時代や少年時代に感じていた自分自身のアイデンティティなど微塵もないことに気づいて愕然とする。

そんな不安に駆られると、私は決まってくだらないマンガやサイコパスな小説を読み耽ったり、バイクにまたがってみたり、カラオケで最新曲を歌いに行ったりする。

ほんの少し鎧に抗って、自分自身のコアに触れようと試みる。

しかし、それも一時の悪あがきのようなもので、鎧の内側は既に細胞と癒着して、どんなに腕の良い外科医でも既に剥離は困難な状態にあることを痛感する。教員としての自分は、もはや自分の一部なのだ。

退職の秒読みが始まった今、「ああ、こんなはずではなかった」と自分の人生を悔やみながら余生を過ごすか、最後まで教師としての姿勢を貫き通すか……。

いずれにせよ、これは第二の自分探しだと私は思う。自分探しは、何も若者だけの特権ではない。社会のしがらみの中で、自分自身を見失いかけたシニア世代が、過去の自分を取り戻そうと足掻いてみる行動は、第二の人生を踏み出す上での大切なセレモニーの一つだと思う。

今、私にはこの重たい鎧の脱ぎ方が問われている

---

---